

第二場面 八組のまとめ

「僕」は、朝から夕方まで、家にも帰らず、学校の時間でも関係なくちようを探していた。知性は使わず、自分のほしだけというように、ちよう集めに熱情を持っていた。

小川留梨奈

「僕」は、学校の時間や、大事なご飯もすっぱかして、あさから晩まで、塔の鐘の音も聞こえない遠くまで歩き回り、大人になっても忘れないほどちよう集めに熱情を持っていた。

古川大樹



「僕」は、初めは流行りに合わせて始めただけだったが、十歳になると、「僕」はちよう集めのとりことなっていた。ちようを見たときや捕らえたときの喜びはさまざまだった。また、このころは何よりもちよう集めを優先するほどちよう集めに熱情をもっていた。

梅田旬太郎

「僕」は、ちよう集めという遊戯のとりこになり、食事だろうが学校の時間だろうが、やっていた。採るときの微妙な喜びや激しい欲望とともに、ちよう集めに熱情を持っていた。

横山あさ実

「僕」は、ちようを採ることのとりことなり、その熱情は、朝から夜まで、食事になんか帰らないぐらいで、家族も「やめさせよう」と思うほどのものだった。これほど、ひどく心を打ち込んで、ちよう集めに熱情を持っていた。

赤座りな

「僕」は、今まで普通にやっていた食事、学校よりも、みんなに流されてやっていたちよう集めの方が大好きになった。「僕」の生活の一部と言ってもいいだろう。ちよう集めをしていた

ときは、ともかくがむしやらだった。それほど早くちようがほしかつたのだ。森の深くまで行って、塔の時計が聞こえないことも、毎日のようにあった。しかし、不思議と、「帰ったら怒られる」などの不安はなかった。それほどちよう集めに熱情を持っていた。

高橋みなみ

「僕」は、八つか九つの時に、流行りだったちよう集めを始めた。しかし、十歳、二度目の夏には、ひどく心を打ち込んでしまった。学校の時間だろうが、お昼ご飯だろうが、まったく気にしなかった。ましてや塔の時計が鳴るのなんか、まったく聞こえなかった。休暇の日なんか、朝から夜まで食事になんか帰らないで駆け歩くことがあった。それほどちよう集めに熱情をもっていた。

堀 鮎美

「僕」は、当時、流行りだったため、ちよう集めを始めた。しかし、ちようを見るたび、緊張や歓喜、激しい欲望に駆られた。そのため、やめることができなくなり、食事や学校をすっぱかして、一日中ちよう集めに明け暮れるようになった。当然、親は心配をしてもやめさせようとしたが、それはできなかった。それほど「僕」はちよう集めに熱情をもっていた。

大野晃季